

Title	WAI技法を用いたself-imageの研究(2) : WAI反応の発達的变化
Sub Title	A study of self-image with the WAI technique (2) : developmental changes in WAI responses
Author	槇田, 仁(Makita, Hitoshi) 岩熊, 史朗(Iwakuma, Shiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1988
Jtitle	哲學 No.87 (1988. 12) ,p.305- 327
JaLC DOI	
Abstract	The WAI is a technique for investigating self-attitudes invented by Kuhn McPartland (1954). In this technique, subjects write twenty statements responding to a question "Who am I? It is effective for investigating self-image because it allows each subject to describe himself/herself in his/her own words. However, to analyse WAI responses statistically, they must be classified into some categories. "KIJUNSHO" is a system of categories for WAI responses constructed through content analysis of the responses. And it have been revised four times. In this study, the WAI responses of 4,948 subjects aged from 9 to 19 are classified by using "KIJUNSHO". Then, the development of self-image is investigated based upon the analysis of the WAI responses. The results show that large part of WAI responses are self-images about one's directive aspect of personality or one's social relation. Self-images about one's need, hope or desire and self-images about one's character are found frequently among older subjects' responses. The proportion of subjects whose responses are classified into social or abstract categories is higher in older subjects than in younger subjects. These results mean that self-images of older subjects are more internal, more social, and more abstract than those of younger.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000087-0305">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000087-0305</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (2)\*

—WAI 反応の発達的变化—

槇田 仁\*\*・岩熊史朗\*\*\* \*\*\*\*

## A Study of Self-Image with the WAI Technique (2)

—Developmental Changes in WAI Responses—

*Hitoshi Makita & Shiro Iwakuma*

The WAI is a technique for investigating self-attitudes invented by Kuhn & McPartland (1954). In this technique, subjects write twenty statements responding to a question "Who am I? It is effective for investigating self-image because it allows each subject to describe himself/herself in his/her own words. However, to analyse WAI responses statistically, they must be classified into some categories. "KIJUNSHO" is a system of categories for WAI responses constructed through content analysis of the responses. And it have been revised four times. In this study, the WAI responses of 4,948 subjects aged from 9 to 19 are classified by using "KIJUNSHO". Then, the development of self-image is investigated based upon the analysis of the WAI responses. The results show that large part of WAI responses are self-images about one's directive aspect of personality or one's social relation. Self-images about one's need, hope or desire and self-images about one's character are found frequently among older subjects' responses. The proportion of subjects whose responses are classified into social or abstract categories is higher in older subjects than in younger subjects. These results mean that self-images of older subjects are more internal, more social, and more abstract than those of younger.

\* 本研究は、福沢諭吉記念慶應義塾学事振興基金(昭和61年度および62年度)の補助による「義塾一貫教育の縦断的研究—WAI(Who am I?)技法を用いた自我の発達的研究を中心として—」(研究代表者:槇田 仁)の一環と

## §1 はじめに

WAI 技法は Kuhn と McPartland (1954) によって考案された技法で、20答法あるいは TST (Twenty Statements Test) とも呼ばれている。これは、被験者が「私は誰でしょう? (Who am I?)」という問いに自問自答して20通りの回答を自由に書くものである。この技法は、自己概念や self-image の研究に用いられてきた。

この技法の最大の特徴は自由回答法を用いていることである。そのため、得られる反応は、被験者自身の言葉による自発的な自己記述となる。自己概念の研究に多く用いられてきたQ分類技法やチェック・リスト法の場合、自由回答法と異なり、研究者が予め用意した項目について、被験者が、自分にどれくらい当てはまるか、あるいは、自分に当てはまるか否かについて評定を行なう。このような方法において被験者は、与えられた次元の上においてのみ自己を評価し、自己を記述する次元を自ら選択する余地はない。自由回答法を用いた“Tell Us about Yourself” テストを考案した McGuire と Padawer-Singer (1976) は、研究者によって与えられた次元における個人の位置づけよりも、個人が自己を記述するために選択する次元の方が、自己概念研究においてより重要であると指摘している。自由回答法は、被験者の自発的な自己記述を多様性を失わずに得るこ

---

して行なわれた。また、データの収集に御協力いただいた慶應義塾高等学校、志木高等学校、女子高等学校、普通部、中等部、幼稚舎の先生方と明星学園高等学校、茨城県立日立第一高等学校、田無市立第四中学校、相模原市立清新小学校、河口湖町立船津小学校の先生方に心より御礼を申し述べたい。

\*\* 慶應義塾大学文学部教授 (人間科学専攻)

\*\*\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (社会学専攻)

\*\*\*\* 本研究において、データの収集・整理・分類評価・入力にあたった榎田ゼミナール18期生および19期生の諸君に感謝の意を表す。特にゼミナールの中心となって作業にあたった笠原克巳君 (昭和63年卒) には改めて御礼を申し述べたい。

とが可能であり、自己概念や self-image やの研究において有効な方法と言えるだろう。

自由回答法を用いた自己概念・self-image の研究技法としては、WAI 技法のほかに、W-A-Y 技法 (Bugental & Zelen, 1950) や前述の “Tell Us about Yourself” テスト (McGuire & Padawer-Singer, 1976; McGuire & McGuire, 1981) がある。これらの技法は、相互にかなり類似したもののだが、教示、反応数、反応収集の方法において若干異なっている。W-A-Y 技法では、被験者に「あなたは誰ですか? (Who are you?)」という問いに対する 3 通りの回答を書くよう求める。“Tell Us about Yourself” テストは、「あなた自身のことについて、私たちに教えて下さい。」という教示に対し、被験者に 7 分間紙に記述させるか、あるいは、5 分間口頭で話させるというものである。これらの方法の中では、WAI 技法がいくつかの点で優れている。まず、WAI 技法は、集団施行や被験者の自宅での施行が可能のため、大量のデータを収集することができる。“Tell Us about Yourself” テストは時間制限を設けているため、自宅での施行は難しい。W-A-Y 技法は、個人内の多様な自己概念や self-image を捉えるには、回答数が少な過ぎるといった難点を持っている。また、WAI 技法の教示によって多様な反応が得られることを示唆する報告もなされている (菊池, 1970)。

WAI 技法によって収集された反応に対しては、Q分類技法やチェック・リスト法のような数量的処理を直接行なうことはできない。一般に、WAI 反応は反応カテゴリーを用いて分類評価されてから集計される。いくつかの WAI 反応のカテゴリー・システムが考案されているが、一般に多く使われているのは Gordon (1968) や McLaughlin (1966) のものである。Gordon は、社会的同一性という視点からカテゴリーを構成している。また、McLaughlin は、Rogers の理論を参考にしてカテゴリーを構成している。しかし、特定の理論に基づいてカテゴリーを構成することには、

問題があるように思われる。その1つは、依拠する理論の違いによってカテゴリ自体も違ったものになってしまうことである。そうすると、理論背景の違い研究の結果を相互に比較することも難しい。もう1つの問題は、反応を分類評価する時に、その理論における基準によって反応が取舍選択されてしまうことである。その結果、WAI 技法の長所である反応の独自性が、研究者の視点によって制限されてしまう。

このような問題点に留意して、著者らは、WAI 反応の内容分析を通じて、分類カテゴリを帰納的に作成する試みを数年前より続けてきた (eg. 榎田・岩熊, 1988; 西村・榎田・岩熊・小林, 1987)。これは、理論的な前提に基づいてア・プリオリにカテゴリを設定するのではなく、WAI 反応の KJ 法 (川喜田, 1967) による内容分析の結果に基づいてカテゴリを設定するというものである。また、データを増やす一方で、実際にカテゴリを用いて反応の分類評価と集計を行ない、その結果を参考にしながら、数回にわたってカテゴリの改訂を行なってきた。このようにして作成されたカテゴリ・システムは「基準書」と呼ばれ、現在は 1987 年度版基準書を WAI 反応の分類評価に用いている。

このように帰納的にカテゴリを設定し、カテゴリを標準的な「ものさし」として使えるようにするためには、幅広い層の被験者の WAI を収集し分析する必要がある。特に年少者の WAI 反応の分析は、自我・自己の発達、あるいは、自己概念の形成過程という視点からも、大きな意味がある。Erikson (1959) の言うように、青年期が自我同一性の確立期だとすれば、当然それがなんらかの形で自己概念や self-image にもあらわれてくるだろう。このように、年少者の WAI 反応を収集分析することにより、カテゴリの標準化のための基礎資料とともに、自我・自己の発達の問題についての知見を得ることも可能と思われる。

WAI 技法による発達的研究としては、Montemayer と Eisen (1977) の研究がある。彼らは、前述の Gordon (1968) のカテゴリ・システムを

用いて、10歳から18歳までの262人の被験者のWAI反応を分析している。その結果によれば、年齢的発達に従い、自己概念は具体的なもの（eg. 住所、容姿、所有物、遊び）から抽象的なもの（eg. 個人的な信念、動機づけ、対人的な性格）に変わっていく。ただし、性別や名前は具体的なものではあるが、年齢の高い被験者によっても高い頻度で見られる。ところが Montemayer と Eisen の結果を詳細に見ると、年齢と明確な相関関係の認められるカテゴリーは少ない。もちろん、すべてのカテゴリーが年齢と直線的な相関関係を持つと仮定する必要はないし、むしろ、ある年齢をピークとする逆U字型の曲線関係を仮定する方が自然な場合もある。しかし、Montemayer と Eisen 場合、研究デザインにも問題がある。彼らの研究では、年齢を2歳おきにとっているため、曲線的な関係は見出しにくくなっている。しかも、男女をまとめて集計しているため、性別による発達的な差が相関関係を弱く見せている可能性もある。また、カテゴリーの適切さの問題や、サンプル数の少なさも明確な関係を見い出せない原因となっていると考えられる。本研究では、このような研究デザインの問題も考慮して、年少者のWAI反応を発達的視点から分析し、児童期から青年期にかけての self-image の発達的变化や、自我・自己の確立過程の問題についても考察を加える。

## §2 WAI 反応の収集と分類評価

**WAI 用紙** WAI 技法によって self-image を収集するために一般用 WAI 用紙および小学生用 WAI 用紙（榎田・岩熊，1988）を使用した。一般用 WAI 用紙は、B4版の紙で、左半分に氏名、性別、調査日時、生年月日、年齢、現住所、未婚・既婚、職業を記入する欄と、被験者への教示が印刷されている。右半分には、被験者が self-image を記入するための20の空行があり、各行頭には1から20までの番号が付けられている。小

## WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (2)

学生用 WAI 用紙は一般用とほとんど同じものだが，教示を一般用よりも平易なものにしてある．ここでは，一般用 WAI 用紙の教示を示しておく．

「私は誰でしょう？」という問いに対し，あなたのことについて，20通りの異なる答えを右のページの1番から順に書いていって下さい．思いつくままに，自由に書いていって下さい．書き終わったら，1から20までの答てを見て，特に自分らしいと思われる答えの番号を○で囲んでください．○はいくつつけてもかまいません．

**WAI 反応の収集** 1987年度までに，9歳から19歳までの小学生1,191名，中学生1,154名，高校生2,603名の計4,948名（男子3,240名，女子1,708名）の WAI 反応を収集した．高校生と中学生に対しては，前述の一般用 WAI 用紙を用い，小学生に対しては，小学生用 WAI 用紙を用いた．データの収集は，多くの場合，教室において集団施行で行なわれたが，自宅で施行した者もいる．

**分類カテゴリー** WAI 反応の分類には，1987年度版基準書を使用した．この基準書は，表1にも示されているように，「小項目」と呼ばれる303のカテゴリーを持っており，小項目は9つの「大項目」にまとめられている．基準書は，WAI 反応の KJ 法による内容分析の結果に基づいて構成されている．具体的な手続きとしては，類似したいくつかの WAI 反応をまとめて，それに1つの項目名を与えたものが小項目となる．さらに，類似した小項目を集めることによって，大項目が構成されている．

基準書は1983年度以来，収集されたデータの分類評価の結果に基づき改訂を重ねており，1987年度版は第5版にあたる．1986年度版基準書（榎田・岩熊，1988）との違いはあまり多くはないが，若干の改訂が施されている．まず，従来大項目《その他》に入れられていた〈私は私〉，〈私は誰〉，〈実存的記述〉，〈上位概念・機能部分〉，〈自己規定〉の5つの小項目

表 1 1987年度版基準書の概要

	大項目名	内 容	小項目数
1	能力	知的能力, 専門的能力, 对人的能力などについての記述.	8
2	性格 (気質)	自分の性格についての記述のうち, 精神医学的性格類型の気質 (S, Z, E) といわれるものにほぼ相当するもの.	70
3	性格 (その他)	性格 (気質), 性格 (力動) 以外の自分の性格についての記述.	47
4	自己	自己に対する感情・評価などについての記述. 欲求, 願望, 希望などについての記述. 態度, キャセクションなどについての記述. 「私は私」, 「私は誰」, 実存的な記述. 上位概念, 比喩的な表現など.	90
5	性格 (力動)	自分の性格についての記述のうち, 力動的側面を表すもの.	43
6	身体	容姿・体格, 健康・体質, 身体機能・身体的能力についての記述.	3
7	プライマリー・グループ	血縁的役割, 家族, 家庭についての記述.	12
8	セカンダリー・グループ	名前, 性別, 年齢, 現住所, 出身地, 生年月日 職業, 所属団体, 学歴などについての記述. 友人関係, 対人関係についての記述.	28
9	その他	評価できないもの, WAI に対する批判, 無効回答など.	2

計 303

を大項目《自己》に移動した。これらの小項目は、被験者の自己意識を反映しているので、大項目《自己》に配置する方が良いと判断した。さらに、大項目《自己》には、〈過去指向〉という小項目を新設した。

**WAI 反応の分類評価** 得られたデータは、1987 年度版基準書を用いて、各反応ごとに分類評価された。具体的には、1つの回答を1つの反応と見なし、各反応を最もよく当てはまる小項目に分類していく。ただし、1つの回答の中に複数の反応がある場合もあり、そのような場合には、回答を分割し、それぞれを1つの反応として分類を行なった。そのために1人の被験者の反応数が20を超える場合もある。

反応の分類評価は、大学生15人が分担して行なった。評価者は、評価に先立ち約3ヶ月間の評価トレーニングを行ない、全員が共通の基準で反応を分類評価できるようにした。また、評価者が自分で判断できなかった反応については、全員で討議して分類評価するようにした。

### §3 WAI 反応の分類評価の結果と考察

WAI 反応の基準書による分類評価の結果、4,948名の被験者の総反応数は87,306で、1人当りの反応数は男子が17.4、女子が18.1であった。

**大項目の分析** 表2が、性別、年齢別に見た1人当りの各大項目の平均反応数である。これを見ると、最も反応の多い大項目は《自己》である。《自己》には、パーソナリティの指向的側面についての記述が分類される。そしてこれには、欲求・希望・願望・自己評価についての記述、好みや趣味などのキャセクションについての記述、運命や神などの超越者についての記述、「私は私。」や「私は誰？」などの実存的な記述などが含まれる。《自己》の平均反応数は、男子が7.86、女子が8.32で、1人の反応の約45%が《自己》の反応であったということになる。性別による違いを見ると、全体としては女子の方が多いが、年齢によっては男子が多いところもある。年齢による違いを見ると、男女のいずれにおいても、10歳で最も少なく、15歳で最も多い。しかし、《自己》の反応数と年齢との間には明確な相関関係は認められない。

表 2 各年齢の大項目平均反応数

年齢	被験者数		能力		性(気)		性(質)		性(その他)		自己		性(方動)		身体		プライマリー・グループ		セカンダリー・グループ		その他		反応数	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
9	160	125	0.46	0.41	0.39	0.57	0.21	0.20	8.79	8.47	0.23	0.15	1.84	1.38	0.32	0.59	4.00	4.25	0.01	0.02	16.3	16.0		
10	176	123	0.57	0.34	0.70	0.86	0.30	0.27	7.07	7.07	0.36	0.29	2.16	1.86	0.49	0.75	3.52	3.89	0.05	0.01	15.2	15.3		
11	163	113	0.48	0.34	0.52	0.90	0.37	0.44	7.84	7.80	0.31	0.54	1.91	1.84	0.85	1.28	4.36	4.00	0.09	0.00	16.7	17.1		
12	189	111	0.55	0.42	0.76	0.97	0.47	0.44	8.23	7.89	0.28	0.43	2.16	1.83	0.87	0.88	4.33	4.37	0.12	0.02	17.8	17.3		
13	256	70	0.33	0.41	1.15	1.90	0.61	0.64	8.27	8.07	0.44	0.80	2.39	1.49	0.69	0.56	4.10	3.54	0.18	0.50	18.2	17.9		
14	317	62	0.58	0.31	1.19	0.95	0.83	0.40	7.86	8.45	0.64	0.63	1.83	1.77	0.60	1.08	4.49	5.53	0.26	0.08	18.3	19.2		
15	323	109	0.42	0.31	1.47	1.57	0.74	0.80	8.85	9.62	0.67	1.09	1.77	1.35	0.48	0.70	3.78	3.25	0.35	0.17	18.6	18.9		
16	569	259	0.40	0.32	1.42	1.56	0.75	0.64	7.80	8.06	0.95	1.42	1.20	1.68	0.59	0.84	3.77	3.83	0.46	0.26	17.3	18.6		
17	473	309	0.38	0.24	1.05	1.75	0.73	0.76	7.29	8.06	0.77	1.53	0.98	1.20	0.64	0.76	4.48	4.00	0.70	0.17	17.0	18.5		
18	529	384	0.44	0.24	1.25	1.71	0.72	0.76	7.51	8.91	0.95	1.48	1.43	1.46	0.54	0.84	3.96	3.48	0.51	0.32	17.3	19.2		
19	85	43	0.44	0.16	1.20	1.86	0.85	0.63	7.61	9.09	1.12	1.19	1.19	1.30	0.66	0.63	4.28	3.33	0.38	0.21	17.7	18.4		
全体	3240	1708	0.44	0.30	1.12	1.42	0.65	0.61	7.86	8.32	0.69	1.07	1.59	1.52	0.60	0.81	4.08	3.87	0.37	0.19	17.4	18.1		

※大項目平均反応数は、各被験者集団での各大項目の総反応数をその被験者数で割ったものである。

このように《自己》の反応数が多くなった理由としては、大項目《自己》に含まれる小項目数が多いことがあげられる。《自己》の小項目数は90項目あり、基準書の中では最も小項目数が多い。しかも、項目の内容も他の大項目よりも多岐にわたっている。そこで、《自己》のうち、キャセクションについての記述、超越者についての記述、実存的な記述などを除いて、欲求・希望・願望・自己評価についてのみの平均反応数を算出した。図1のように、欲求・希望・自己評価は、年齢が上がるに従って増える傾向を示している。即ち、《自己》全体の反応数は、必ずしも年齢とともに増えるわけではないが、その中の欲求・希望・自己評価は、年齢とともに増えるということである。

次に平均反応数の多い大項目は、《セカンダリー・グループ》である。ここには、〈名前〉、〈性別〉、〈年齢〉などのデモグラフィックな属性に関する小項目や、学校や友人に関する小項目などが含まれている。つまり、社会と自己との関連を記述した回答がここに分類されることになる。この大項目の平均反応数は、14歳の女子が5.53と高くなっているのと19歳の

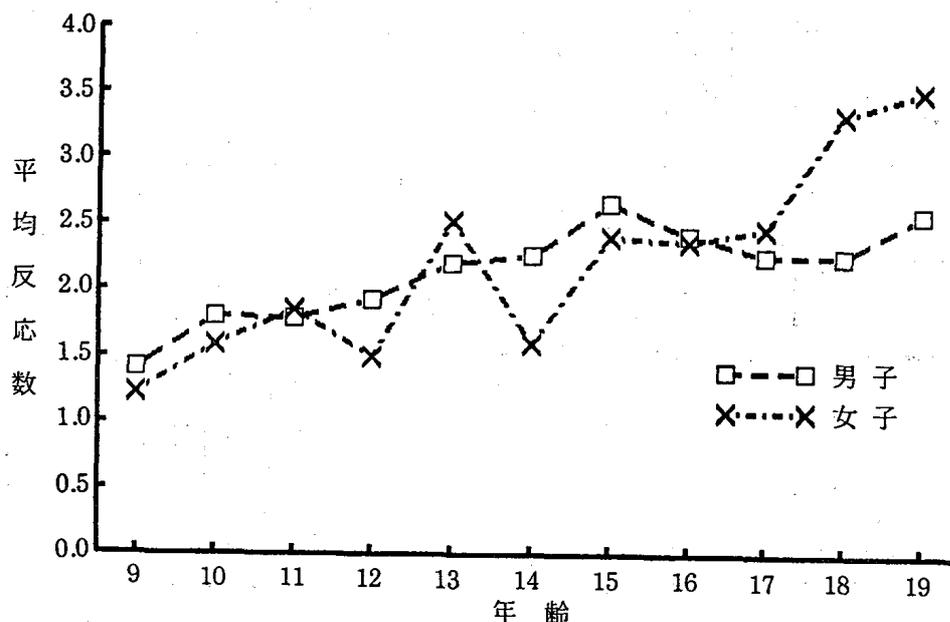


図1 欲求・希望・願望・自己評価の平均反応数

女子で3.33と低くなっている以外は、どの年齢性別でも3.5から4.5の間にあり、比較的安定して高い反応数がある。これは、自己の社会的な側面が、年齢・性別を問わず大きな意味を持つことを示している。

性格に関する3つの大項目は、いずれも年齢とともに平均反応数が増加している。そこで《性格(気質)》、《性格(その他)》、《性格(力動)》の3つの大項目の反応数を合計して、1人あたりの性格に関する反応数を算出した。それと年齢との関係を見ると図2のようになる。男子の場合、11歳と17歳で若干減少しているが、大筋としては年齢とともに増加する傾向を示している。男子の性格の平均反応数は、9歳では0.83であるのに対し、19歳では3.16となっており、約4倍に増加したことになる。女子の場合は、9歳から12歳までの間に0.92から1.85まで増加し、12歳から15歳までの間は激しい変動を示している。しかし、15歳以降は3.5から4.0程度で安定し、男子よりも0.5から1.5ほど多くなっている。

《身体》は、自己の身体に関する記述が分類される大項目で、〈容姿・体格〉、〈健康・体質〉、〈身体機能・身体的能力〉の3つの小項目を持ってい

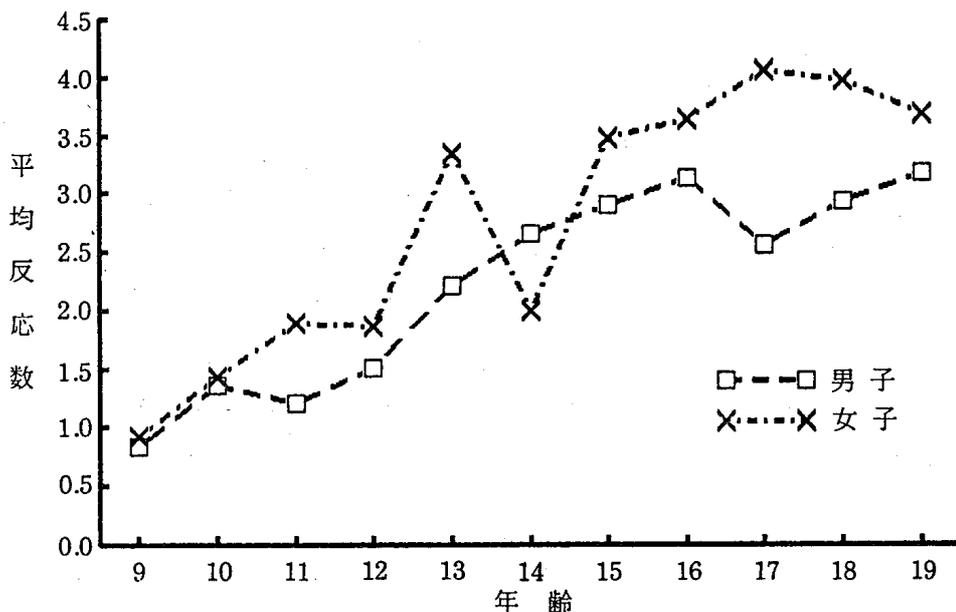


図2 性格の平均反応数

## WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (2)

る。平均反応数を見ると、男子では13歳で最も多く、それ以降減少する傾向にあるが、18歳で再び増加している。女子では、10歳から12歳にかけて反応が多いが、それ以降は減少・増加を繰り返しながら全体としては減少している。男女を比較すると、15歳までは男子の方が反応が多いが、16歳以降は女子の反応数が男子をわずかながら上回っている。

《能力》、《プライマリー・グループ》、《その他》は、全体での平均反応数が1.0に満たない。これは、これらの大項目に分類される回答を1つも書かない被験者がかなりいることを示している。特に《能力》と《その他》の平均反応数は0.5を下回っており、WAI ではこのような反応が比較的少ないことを示している。

家族や家庭に関する記述の分類される《プライマリー・グループ》は、発達的に見ても重要である。そこで、実際にこの大項目に1回以上反応している被験者のパーセンテージを言及率とし、その年齢による変化を調べてみることにした。その結果が図3である。これを見ると、13歳を除くすべての年齢で、女子の方が男子よりも言及する割合が高い。年齢による変

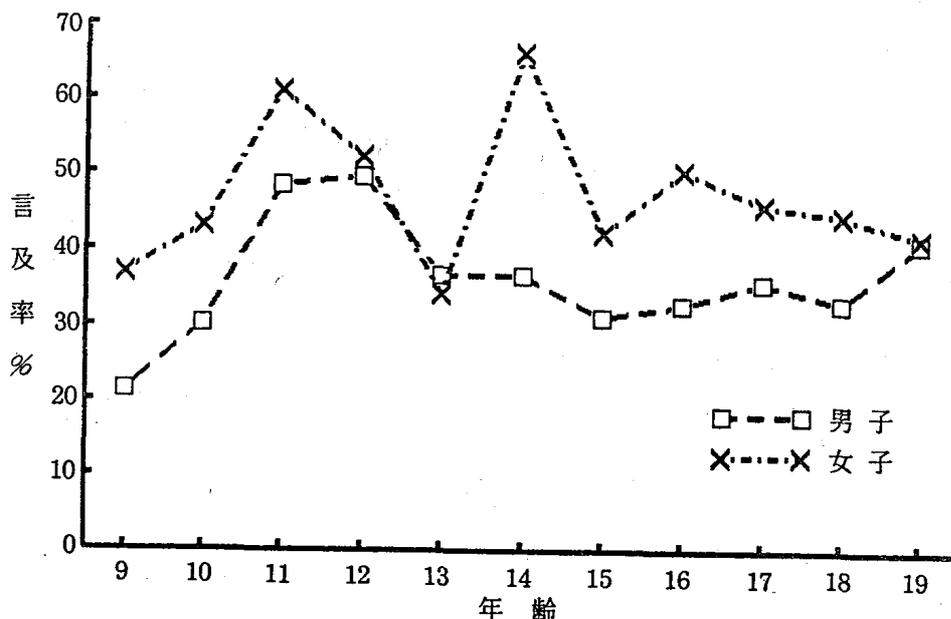


図3 《プライマリー・グループ》の言及率

化を見ると、9歳から11歳までは男女共に言及率が上昇している。男子は13歳で下降し、それ以降は比較的安定している。女子は16歳まで上昇・下降を繰り返すが、16歳以降安定する。そして、19歳の時点では男女の差はほとんどない。女子の方が全般的に言及率が高いのは、女子の家庭との結び付きが男子よりも強いためとも考えられる。

大項目の分析の結果をまとめると、WAI 反応には、パーソナリティの指向的側面に関する記述や自己と社会との関連についての記述が多い。発達的に見れば、欲求・希望・願望・自己評価に関する記述や性格についての記述は、年齢とともに増える傾向がある。また、性格に関する記述と家族や家庭に関する記述は、男子よりも女子に多い。

**小項目の分析** ここまでは、大項目を中心に分析を行ってきたが、ここで分析の焦点を小項目に移してみよう。前にも述べたように、基準書には303の小項目があり、各小項目は9つの大項目にまとめられている。大項目の分析は、全体的な傾向を見るのには適しているが、より細かいself-imageの特徴を捉えるには、小項目を分析の焦点に置く方がよい。反応の多い小項目を分析することによって、self-imageの発達の特徴を捉えることができるものと思われる。小項目についても、平均反応数（各小項目の被験者1人あたりの反応数）と言及率（各小項目に1回以上反応した被験者のパーセンテージ）の両者を算出することができる。しかし、1人が同じ小項目に複数回反応するケースはあまり多くないので、言及率を分析指標として用いることにする。

表3は、被験者全体での言及率が10%以上の30の小項目について、小・中・高校生別、男女別に言及率を示したものである。この小項目の内訳を大項目別に見ると、《自己》が13項目、《セカンダリー・グループ》が9項目、《身体》が3項目、《プライマリー・グループ》が2項目、《性格（気性）》、《性格（その他）》、《その他》が各1項目である。これを見てもわかるように、《自己》と《セカンダリー・グループ》の小項目が多くな

表 3 小項目の各被験者集団における言及率 (%)

小 項 目 名	全体	小学生		中学生		高校生	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子
学校に関する記述⑧	66.7	61.6	61.7	65.5	64.0	70.8	68.0
好み④	53.7	55.6	62.3	55.7	72.5	40.7	62.8
上位概念・機能部分④	48.6	68.6	59.4	46.2	34.6	47.1	36.8
性別⑧	47.6	47.6	58.2	39.1	38.4	47.8	52.1
容姿・体格⑥	40.1	45.1	51.8	45.4	46.4	28.6	42.9
国籍⑧	34.2	35.7	31.9	37.1	22.7	36.8	29.9
勉強④	32.1	41.0	45.8	36.7	44.5	20.5	30.7
生活習慣 (生活態度) ④	31.9	32.5	29.0	36.6	23.2	28.1	36.1
健康・体質⑥	31.0	32.5	30.4	37.4	32.2	27.0	30.5
スポーツ④	30.9	43.8	35.6	36.3	39.8	20.9	28.4
住所⑧	29.1	21.2	14.1	34.8	17.5	35.6	28.7
身体機能・身体的能力⑥	28.8	45.9	30.4	38.8	22.3	23.5	16.4
自己規定④	28.8	28.0	20.9	29.7	22.3	33.8	25.8
血縁的役割⑦	26.6	20.9	29.6	22.8	25.1	25.9	34.2
生活状態④	26.6	26.1	23.8	31.5	13.3	26.6	26.5
名前⑧	25.4	42.8	46.8	13.3	10.9	25.2	17.8
飲食④	22.5	33.5	32.3	23.4	27.0	9.8	28.4
審美④	19.7	9.0	28.4	18.1	25.6	17.7	26.2
年齢⑧	19.2	17.8	18.4	16.9	15.2	18.9	24.2
その他の趣味④	19.1	18.4	27.1	23.1	18.0	12.7	22.4
所属団体 (学内サークル) ⑧	19.1	10.9	10.8	21.1	26.5	22.0	20.9
友人に関する記述⑧	15.0	16.4	23.8	16.4	21.3	9.2	16.5
現在の欲求・希望④	14.8	5.8	8.3	13.9	20.9	13.0	26.7
世代 I (年齢) ⑧	14.7	25.6	26.3	13.7	6.6	12.0	8.6
《その他》その他⑨	13.7	4.9	1.4	15.3	9.0	21.1	13.5
《自己》その他④	12.4	9.5	8.3	10.3	12.8	13.5	16.5
私は私④	12.0	9.3	6.2	12.2	10.0	14.9	12.1
明るい・明朗・陽気②	11.5	5.2	12.6	13.6	22.3	8.0	16.8
短気である③	10.4	8.2	8.9	16.2	13.3	9.2	8.5
兄弟に関する記述⑦	10.2	16.2	23.0	7.0	10.0	5.9	10.0
被験者数	4948	708	483	943	211	1589	1014

※被験者全体での言及率が 10% 以上の 30 の小項目だけを記載した。各小項目の後の番号は、小項目の所属する大項目の番号である。

っている。これは、大項目の分析において確かめられた傾向と一致する。一方、性格に関する小項目は2項目しか含まれておらず、性格に関する反応が多く的小項目に分散していることが示されている。また、《身体》の3つの小項目は、すべてこの30項目に含まれており、self-imageにおける身体の重要性を示唆している。

この30項目の言及率の年齢による変化や性差を見るために、言及率を6つの被験者集団間（小・中・高校生×男・女）で比較した。具体的には、各小項目の言及率について、比率の差の検定（クリティカル・レイシヨ）を用いて、小学生と中学生、小学生と高校生、中学生と高校生を男女別に比較し、男子と女子を小・中・高校生別に比較した。そしてこの結果に基づき、各小項目の年齢による変動パターンの分析を行なった。ここでは、年齢とともに言及率が下がる“下降パターン”、言及率が上がる“上昇パターン”、小学生・中学生間で下降し、中学生・高校生間で上昇する“V字型パターン”、その反対の“逆V字型パターン”の4つを考えた。また、小学生から高校生まで一貫してあらわれる性格についても分析を行なった。その結果をまとめたものが表4である。\*

この表では、主に示す変動パターンによって、小項目を便宜的に3つのグループに分けている。一番上の8項目は下降パターンを示すグループである。この中で、キャセクションの〈飲食〉は、女子において下降パターンではなくV字型のパターンを示しているが、それ以外は、両性において

\* 各反応パターンの評価基準は以下の通りである。下降パターンは、小学生が高校生よりも有意に高い言及率を示すものである。それに加えて小・中学生間および中・高校生間に言及率の上昇がないものは、特に強い下降パターンを示しているものとした。上昇パターンは、下降パターンと逆の結果を示すものである。V字型パターンは、小・中学生間で言及率の低下があり、中・高校生間で上昇のあるものである。その両者が有意なものは、V字型パターンを特に強く示しているものとした。逆V字型パターンは、V字型パターンと逆の結果を示すものである。性差については、すべての年齢層で一貫した傾向を示しているものを選んだ。さらに、すべての年齢層において同一方向に有意なものは、特に強く性差を示しているものとした。

表 4 小項目言及率の年齢による変動パターンと性差

小項目名	変動パターン								性差	
	下降		上昇		V字		逆V字		男 V 女	女 V 男
	男	女	男	女	男	女	男	女		
身体機能・身体的能力	◎	◎							◎	
勉強	◎	◎								○
世代 I (年齢)	◎	○				○				
スポーツ	◎	○					○			
兄弟に関する記述	◎	○				○				○
飲食	◎					○				
容姿・体格	○	◎					○			○
友人に関する述記	○	◎								○
《その他》その他			◎	◎					◎	
住所			◎	◎					◎	
自己規定			◎	◎					◎	
私は私			◎	◎					○	
《自己》その他			◎	◎						
学校に関する記述			◎	◎						
所属団体 (学内サークル)			◎	○				○		
血縁的役割			◎			○				○
現在の欲求・希望			○	◎			○			○
名前	○	○			◎	◎				
性別		○			◎	◎				
生活状態						◎	◎		○	
国籍						◎	◎		○	
その他の趣味	○	○				○	◎			
健康・体質	○						◎	○		
明るい・明朗・陽気			○	○			◎	◎		◎
短気である							◎	◎		
好み	○						◎	◎		◎
上位概念・機能部分	○	○			○	○			◎	
生活習慣 (生活態度)	○			○		○	○			
審美			○			○	○			◎
年齢				○	○	○				

※ “○” は、各小項目がそれぞれの変動パターンの傾向を持つことを示し、“◎” は、特に強い傾向を持つことを示す。

下降パターンが見られる。この中には、〈身体機能・身体的能力〉と〈容姿・体格〉の2つの身体に関する小項目が含まれている。しかし、〈健康・体質〉は含まれていない。これは、身体的な self-image の中では、外面的なものが年齢とともに下降することを示している。その他の項目を見ると、被験者にとって身近で日常的なものに関連している小項目がこのグループには多い。

2番目のグループは、主に上昇パターンを示す小項目群である。この中の〈自己規定〉には、メタファーや被験者が独自の表現を用いて自己を記述した反応が分類される。また《自己》の〈その他〉は、大項目レベルでは《自己》に分類できるものの、適当な小項目がないものが分類される。このような分類評価の難しい反応をする被験者が、高い年齢に多くなっている。〈住所〉、〈学校に関する記述〉、〈所属団体（サークル）〉も上昇傾向を示しており、自己の社会的な側面が年齢とともに拡大することが読み取れる。男子では〈血縁的役割〉が上昇しているが、それでも女子の方が一貫してこの小項目の言及率は高い。このことは、self-image における家庭・家族の意味の性別による違いを示していると思われる。

3番目のグループには、上の2つのグループよりも複雑な変動を示す小項目が分類されている。例えば、〈名前〉や〈性別〉は男女共にV字型の変動パターンを示しており、〈健康・体質〉、〈明るい・明朗・陽気〉、〈短気である〉、〈好み〉は逆V字型のパターンを示している。また、このグループの中には、複数のパターンを合わせ持っていたり、男女が違うパターンを示すものもある。これは、self-image の発達が必ずしも単純なものだけではないことを物語っている。

次に性差について見ると、〈身体機能・身体的能力〉、大項目《その他》の〈その他〉、〈住所〉、〈自己規定〉、〈上位概念・機能部分〉の5項目は、男子の言及率が女子よりも特に高い。また、〈明るい・明朗・陽気〉、〈好み〉、キャセクションの〈審美〉の3項目は、女子の方が男子よりも特に

高くなっている。この中で、《その他》の〈その他〉には、他のいずれの小項目にも分類できない評価不可能な反応や WAI に対する批判などが分類され、〈上位概念・機能部分〉には、「人間」とか「手が2本ある。」といった反応が分類される。この結果を見ると、女子が男子よりも言及率が高い小項目は、キャセクションや性格など自己の内面に関するものである。それに対し男子の言及率が高い小項目は、あまり内面とは関係ないので、特に抽象的な記述を分類する小項目が目に着く。

以上のような結果から、年齢が上がるに従って、WAI 反応は、日常的で身近なものから、抽象的で広い社会と結び付いたものになっていくことがわかる。しかし、これは、日常的なものが self-image から消えていくことを意味しているのではない。むしろ、抽象的で広い社会と結び付いたものが self-image の中心となることによって、それまで中心的であった日常的なものが周辺に追いやられたと考えるべきであろう。というのも、WAI にあらわれるのは、self-image の中心的で顕著な部分であり、周辺の部分はあまり表現されないと考えられるからである。

**学校間の差異の分析** WAI 反応には、上記のような一般的な傾向があることがわかった。しかしその一方で、一般的傾向だけでは捉えきれない様々な個人差も存在する。そこで、学校別に分析を行ない、各校の児童・生徒のの特色を調べるとともに、WAI 反応の個人差の問題についても考察してみたい。

分析の対象としたのは、被験者数の比較的多かった10校（小学校2校、中学校3校、高校5校）の児童・生徒である。表5は、各学校別に大項目の平均反応数を示したものである。

小学校のA校とB校とを比較すると、B校の方が反応数が多く、ほとんどすべての大項目でB校の平均反応数も多くなっている。特に、《自己》、《身体》、《セカンダリー・グループ》では大きな差が見られる。

中学校を見ると、学校間の反応数の違いは大きくない。しかし、《自己》、

表 5 学校別に見た大項目平均反応数

学 校	被験者数		能 力		性 格 (気 質)		性 格 (その他)		自 己		性 格 (方 動)		身 体		プ ラ イ マ リ ー ・ グ ル ー プ		セ カ ン ダ リ ー ・ グ ル ー プ		そ の 他		反 応 数		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
小 学 校	A	296	293	0.51	0.32	0.51	0.78	0.40	0.31	7.34	7.41	0.20	0.32	1.58	1.49	0.48	0.83	3.78	4.10	0.05	0.01	14.9	15.6
		368	141	0.55	0.48	0.70	1.03	0.36	0.44	8.37	8.50	0.40	0.51	2.48	2.23	0.77	1.05	4.43	4.55	0.08	0.02	18.2	18.8
中 学 校	C	111	121	0.62	0.29	1.39	1.70	0.80	0.66	7.97	9.03	0.59	0.96	2.47	1.55	0.26	0.54	2.95	3.30	0.12	0.26	17.2	18.3
		168	75	0.23	0.49	0.74	1.17	0.62	0.48	10.18	9.19	0.50	0.96	1.64	1.61	0.45	0.71	3.56	3.31	0.48	0.32	18.4	18.2
高 校	E	651	-	0.49	-	1.46	-	0.75	-	8.17	-	0.70	-	1.94	-	0.63	-	4.13	-	0.30	-	18.6	-
		F	116	74	0.26	0.26	1.75	1.91	1.03	0.89	6.79	6.93	0.80	1.73	1.03	1.07	1.13	1.14	6.12	5.86	0.49	0.18	19.4
高 校	G	39	93	0.05	0.25	0.56	1.84	0.41	0.95	7.46	8.26	0.64	1.71	0.92	1.16	0.15	0.94	3.13	2.69	1.54	0.10	14.9	17.9
		H	562	-	0.41	-	0.98	-	0.63	-	7.02	-	0.67	-	1.14	-	0.55	-	3.79	-	0.50	-	15.7
高 校	I	794	-	0.42	-	1.25	-	0.75	-	7.79	-	0.99	-	1.24	-	0.61	-	4.32	-	0.55	-	17.9	-
		J	-	645	-	0.26	-	1.58	-	0.63	-	1.29	-	1.57	-	0.75	-	3.69	-	0.33	-	18.6	-

《身体》, 《セカンダリー・グループ》の反応数には違いが見られる。D校は、男女ともに《自己》の反応数が多いが、《性格(気質)》の反応は少ない。《身体》では、C校の男子が他校よりも多くの反応をしている。E校は、《セカンダリー・グループ》の反応が他校よりも多い。

高校では、F校が他校とはかなり異なった反応を示している。《性格(気質)》, 《プライマリー・グループ》, 《セカンダリー・グループ》の反応が多いが、《自己》は少ない。そして、反応数の平均は19以上もある。G校は男女差が大きく、《性格(気質)》, 《自己》, 《性格(力動)》, 《プライマリー・グループ》で女子が多くの反応をしている。しかし、《セカンダリー・グループ》と《その他》の反応は男子の方が多い。反応数は女子の方が男子より平均して約3反応多い。H校は性格に関する3つの大項目の反応が少ない傾向にあり、反応数も少ない。I校は、高校生男子で最も《自己》の反応が多い。また、反応数と《セカンダリー・グループ》の反応はF校について多い。J校は、《自己》と《身体》の反応が高校生で最も多く、性格についての反応は、高校生女子で最も少ない。

以上のような結果を全体的に見ると、《自己》, 《セカンダリー・グループ》, 《身体》において学校間の差異がよくあらわれている。学校間の差異が大きいということは、それだけ個人差が大きいということを示唆しており、しかも、その個人差を学校の違いによってある程度説明できることを示唆している。学校が個人の self-image に影響を与えるのか、あるいは、特定の self-image を持った個人が特定の学校に集まるのかは、この結果からはわからない。しかし、同じ学校に通学する児童・生徒の self-image の間には、ある程度の類似性が認められる。また、この3つの大項目は、パーソナリティの指向的側面、自己と社会の関係、自己の身体に関するものであり、self-image の中ではかなり重要な部分と言える。つまり、self-image の重要な側面においても、その力点の置き方は個人によって異なり、同じ学校の児童・生徒の間にはある程度の共通性が存在するというこ

とである。

#### §4 お わ り に

本研究では、WAI 技法を用いて得られた小・中・高校生の self-image を、発達の視点から分析した。その結果を簡単にまとめると、以下のようになる。

まず、大項目の分析から、WAI 反応には、パーソナリティの指向的側面に関する記述、自己と社会との関係についての記述が多いことがわかった。また、指向的側面の中の欲求・希望・願望・自己評価の記述や、性格についての記述は、年齢とともに増加する傾向がある。男女の違いについては、男子よりも女子に家族・家庭に関する記述をする者が多い。小項目の分析結果からは、self-image の中心的領域は、年齢が上がるに従って、日常的で身近なものから、抽象的で広い社会と結び付いたものになっていくことがわかった。そして、最後に学校間の差異の分析では、パーソナリティの指向的側面、自己と社会の関係、自己の身体に関する反応数において、学校間の差異が最もよくあらわれている。これは、このような部分において個人差が大きいことと、その個人差を学校の違いがある程度説明していることを示している。

以上のような結果から self-image・自己概念の発達の变化について考えてみることにしよう。年齢の上昇にともなう self-image の変化として、大きく分けて3つの傾向を認めることができる。その1つは、自己の内面に向かう意識が強くなる傾向である。大項目の平均反応数を見ると、自分の性格や欲求・希望・願望のような自己の内面の傾向や状態についての記述が年齢とともに増えている。また、自己評価も増えており、自己の内面に向かう意識は発達に伴って強くなる傾向がある。

2つめは、社会的に自己を捉えようとする傾向である。大項目《セカン

ダリー・グループ》の反応数の年齢的变化はあまり大きくない。しかし、小項目の分析からもわかるように、住所、学校、サークルに関する記述は増えており、自己を社会的に規定しようとする傾向が年齢とともに強くなっている。

そして最後は、自己を複雑なものとして捉え、抽象的に表現する傾向である。小項目の分析結果を見ると、勉強やスポーツに対するキャセクションや、外面的な身体に関する記述などの、日常的で具体的な反応をする者は減少する傾向にある。一方、メタファーを用いて自己を規定しようしたり、分類評価の困難な反応をする者は増える傾向にある。また、「私は私。」という記述をする者も増えている。このように、自己を単純には表現できないものとして捉え、より複雑で抽象的な表現を用いる傾向は年齢とともに強くなっている。

自我同一性の確立期は一般に青年後期と考えられ、本研究の被験者の多くは確立以前にあると言える。そういう意味では、上に述べられた3つの発達の傾向は、同一性確立に向けてどのような準備が為されるかを示すものと言えるだろう。つまり、同一性の確立の前には、self-image は内面的なものになり、社会関係がより重要な意味を持つようになる。そして、この時期の self-image は、明快で統合されたものというよりも、難解かつ抽象的なものであり、これはまさに、自我同一性の模索過程を示していると言える。

本研究では、小・中・高校生だけを分析対象としたが、もちろん、self-image は、個人のライフ・サイクルの中で様々な様相を示すものである。そして、このような self-image の分析を通じて、自我・自己の心理学的な理解も進むものと考えられる。そのためには年少者だけではなく、成人・老人をも含めた総合的な分析を行ない、WAI 技法を self-image 研究の有効な道具として確立する必要があると言えるだろう。

引 用 文 献

- Bugental, J. F. T., & Zelen, S. L. 1950 Investigation into 'self-concept': I. The W-A-Y technique. *Journal of Personality*, 18, 483-498.
- エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性 誠信書房  
(Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.)
- Gordon, C. 1968 Self-conceptions: Configurations of content. In C. Gordon, & K. J. Gergen (Eds.), *The self in social interaction*. vol. 1. *Classic and contemporary perspectives*. New York: Wiley, Pp. 115-136.
- 川喜田二郎 1967 発想法 中公新書
- 菊池登紀子 1970 青年期における自己観 [1] —私立女子高校生における発達の様相— 岩手大学教育学部研究年報 30, 57-74.
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.
- McGuire, W. J., & McGuire, C. V. 1981 Spontaneous self-concept as affected by personal distinctiveness. In M. D. Lynch, A. A. Norem-Hebeisen, & K. J. Gergen (Eds.), *Self-concept: Advances in theory and research*. Cambridge, Mass.: Ballinger. Pp. 147-171.
- McGuire, W. J., & Padawer-Singer, A. 1976 Trait salience in the spontaneous self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 743-754.
- McLaughlin, B. 1966 The WAI dictionary and self-percieved identity in college students. In P. J. Stone, C. C. Dunphy, M. S. Smith, & D. M. Ogilvie (Eds.), *The general inquirer: A computer approach to content analysis*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press. Pp. 548-566.
- 槇田 仁・岩熊史朗 1988 WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (1) —内容分析 (K J 法) による基準書の作成— 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 28, 61-71.
- 西村麻由美・槇田 仁・岩熊史朗・小林和久 1987 WAI を用いた Self-Image の研究 —V. 分類カテゴリーの改訂について— 日本心理学会第51回大会発表論文集, 522.